

時の流れの中に

原 子 朗

ことしの「文芸論叢」は二〇号の記念号ゆえ、それにふさわしい内容の思い出でも書いてほしい、とのことである。植田先生から直接そんなご要請をうけて、先生と雑談にふけっているときは、書きたいことがあふれてくるという感じだった。ところが、いざ、こうやって机にむかると、胸が詰まったようで、何を書いてよいかわからない。書きたいことがありすぎて、とりたいところだが、やはりさびしさのせいらしい。ほんとうにさびしい。落ちこんでゆくようだ。

二十年余お世話になった文芸科と、この春おわかれするので、柄にもなく感傷にふけっていると、読者には思われるだろうか。自分でもそう思いたいところだが。

どうやら、このさびしさは、そんな感傷に純粹にふけることができないところからくる孤独感みたいなものらしい。ひねくれたいいかたをする、さびしさにふけることのできないさびしさ。

学園は法人名も変り、来年度から人跡未踏の処女地に新天地をも

とめてうつるといふ。すばらしいことだ。私もついていきたいくらいだ。私にはまだこれからやらねばならない仕事が多すぎ、時間的に物理的にそれができそうもないことが残念である。ことしはまた偶然、一年間パリ（パリ第七大学）に勉強に行く。実は別の大学からもよばれていて、事情がゆるせばもう一年帰らないかもしれない。そのため文芸科にはいとまをいただくことにした。

二十年あまりといっても、ここ九年間は非常勤をさせていただいたのだから、ただ楽しいだけだった。諸先生や助手さんたちに実にやさしく心をくばっていただくとばかりで有難かった。一所懸命、優秀な学生諸姉と勉強だけしていればよかった。毎週、旗の台通いがほんとうに楽しみで、ほかは休んでも文芸科には来た。

その前の十年余のことは本誌にも二度ほど書かせてもらったが、むろん専任だった。ひとことという、つらいことばかりだった。いや、楽しいこともあるにはあったし、つらさもまた楽しいことだと信じこむ若さで、つらさにも耐えていたのだが、最近の数年間も、現在の専任の諸先生がいろいろつらい思いをしておられるのを傍らで拝見していて、ことに文芸科の学生定員の四十名というワックのために、全国一、二をあらそう難関になったことより、優秀な受験生をみすみす取れないことで、皆さん頭をかかえておられるのを見ていて、私は心がいたむのだった。文芸科創設のときのつらさがよみがえって、責任をさえ感じていたのである。

当時のことを知っているかたは学園内にいるはずだが、そこまではつきり記憶してくれているかどうか。簡直に書く、文芸科の定員をせめて六十名でと、私は強く主張したのだった。ほんとうは八十名でよかった。けっきょくは四十名にされてしまったのだが。

よし、それなら量より質でゆくと、くやしきぎれに五反田で一人で大酒を飲んだのも、昨日のこのようだ。むろん大酒の理由は定員のくやしきだけではなかった。毎日、文芸科のための図書を神田で買いあさってくだびれはててもいた。そして一人で飲んだのは、そのとき文芸科はまだなかったから、むろん研究室もなければ文芸科の先生もいなかったからである。私は児童科の助教だった。いかなれば孤立無援。ただ、前年、英文科創設で、これまた人の知らない苦心をなめた出口先生（現・早大教授）だけが唯一の味方だったが、出口先生は酒を一滴もたしなまなかった。

念のためいっておくと、まだ当時は文部省もうるさくなく、こちらがその気なら定員はどうにかなったのである。ただ、私にはひるみもあつた。学生が集まらないときの責任を思った。応募学生がふえてくれば定員増の申請をすればよい、くらいに考えていた。（だからといって、定員をただふやすだけでは、必ず失敗する。文芸科の他に例のない、特長を発揮するには百か百五十をメドにすべきだろう、どんな新天地でも。それは予言してもよい私の信念である。）

さて、つらいことはまだゴマンとあつた。文芸科が看板をかかげ、第一回の募集をはじめたころ、事務局に来ていた付属高の先生が「ブンゲイ科ってレジャー学科なんだろ。みんなそういってるよ」と事務のひとに、鼻であしらうふうにいっているのを、私はロッカーのかがいで聞いた。私がいっているのを知っている事務のひとは、高校の先生をつついて口をつくませていた。「映画・演劇論」や「舞踊と音楽」といった科目名が、そんな印象を与えるらしかつた。

「ブンゲイ科ではテレビ、ラジオの修理や組立てかたを教えるんですか」とケゲンな顔つきで、本気で私に質問する年配の女性の先生

も短大内におられた。当時は「テレビ・ラジオ論」がそんな印象を与えかねなかつたのである。私はそのときの高校の先生のネクタイの色や、年配の女性教授の和服の色柄まで、今もはっきりおぼえている。そして、そんな誤解を世間にも少なからず与えていることも私は知っていた。なにしろ文部省の係官がカリキュラムを見て「日本文芸思潮」「欧米文芸思潮」って何ですか？『文学史』ならわかるけど」といったくらいだから。そして、あとで聞いた話だが「女子短大でゼミなんて……」キャバレーかサロンみたいになるんじゃないかと、大いに憂慮してくれるむきもあつたらしい。

そんなのはつらい、くちには入らないが、当初の応募情況にはひびいていた。「ほら、定員四十でよかつたろ」と、にんまりしてみせるひとも当局者の中にはいた。それはたしかにつらかつたが、よし、付属高からでも、そうはカンタンに入れないような学科にしてみせる、と心に深く誓つたことはたしかである。

それらは私の思い出にちがいない。おおげさにいえば私の心碑に細大するどく刻まれた記録の、細に属する一斑にすぎない。だが、どうして「今はなつかしい思い出」と私は書けないのだろう。事実、私の文は「今もくやししい思い出」としてつづらられているではないか。それが私にはつらい。というよりさびしい。いかにも自分は苦勞をしましたが、人におもねっているのかと思うと、自分がみにくくさえなる。客観的にみれば、私は最初のきつかけ（Formo-ting）づくりをしたにすぎないのかもしれない。あとは勉強家ぞろいの初期の若い先生がたが、そのあともすばらしい先生がたが、非常勤の先生がたや助手の皆さんもふくめて、文芸科をこんにちにしてこられたのであつて、私は黙って見守り、時にはひどい隙間かぜも

うけながら、ついてきただけなのである。だから、きつかけづくりは、じゅうぶん充たされたのだから、静かにひきさがって「今はなつかしい」思い出にふけるべきなのだ。

それが、そうできないのはなぜか。正直にいわせてもらうなら、私の夢が大きすぎたからである。その夢はぜったいに現実化できると信じきっていたからである。日本にまたとない大学にすること、制度でいえば大学院はもちろん、研究所をもつ大学（その研究所の構想まで具体的に私にはあった）、いや制度などではない、こんにちの日本の大学一般をあざわらえるほどのユニークな内実をかみならず実現させるといふ生きた様式の時空の構想と、その自信が、不屈きにも分をこえて私にはあった。その夢が、主観的には挫折させられたという悔恨が、まだ今も私を悲しませる。その大きな悔恨には、そもそもその夢が大きすぎた、というより、小さな夢にせよ、その実現をはばむ組織、制度、そこに見えかくれするさまざまなエゴが、したたかに存在するという、あたりまえかもしれないことへの遺恨もふくまれる。

要するに私はうぬぼれていたし、今もそうなのかもしれない。だから純粹に感傷にもふけることができないのだ。私は、私の心碑の下に安んじて骨をうずめることができたのなら、どんなにか、ふかぶかと甘美な感傷にふけられただろう。そうした感傷への不充足感の中に私はいる。それが私をさびしげらせ、落ちこませる。

ひとはおのれの住もうとねがうところに住むことを許されない——これはたしか伊東静雄の詩の詠嘆だが、では、ひとは異境に住むのか。そうではあるまい。流れくだる時の大きな流れの中に、ただ押し流されてゆくだけのことだ。

文芸科の二十年

わが「遠いコスモス」

松野陽一

今年には仙台も穏やかな歳末です。それでも流石に夕暮れ時ともなると風花がチラホラ舞ってきています。繁華街の外れの丸善の書籍部に立ち寄って受験案内の雑誌を買いこみ、向いのビルの喫茶店の椅子に身を沈めたところです。

——文芸科のランクは全国の短大の全学科を通じても最上位に位置づけられています。応募の倍率も十倍を超えている——十年も内側になっていた人間が、こんな数字で世間並みの評価をするなんて、と思われるかもしれません。二十年前の草創期にゼロから出発をして、来る日も来る日も応募者がいないという苦しみを体験したからこそ数字の読み方も知っているし重さを感じもするのです。本当にオリジナルでユニークな文芸に関する研究と教育の場を創ろうという夢と情熱が強烈であっただけに、社会的反応がさっぱり無いのは実につらいことでした。——今に見ろ、受付開始の日を受験生の列を旗の台の駅まで並ばせて見せる、と教授会で切って見せた啖呵？は椰揄と憫笑に迎えられた時代でした。一年目五四人、二年目三二人